

先生なら、 どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

親や社会に対して憤り、
教師にも反発する生徒に、
「文句だけでは変わらない」と
差し出した手帳

福井県・私立福井南高校 浅井佑記

あさいゆきのり●同校に赴任して11年目。進路支援部。
地理歴史・公民科、情報科。
テレビ局の記者職を経て、高校の教壇に立つ。
生徒と社会をつなげるため、
「総合的な探究の時間」での生徒との時間を
特に大切にしている。



中 学3年次に不登校を経験し、高校でも教師の指導に「うるせえ」と反発する。そんな女子生徒Aさんに担任ではない進路支援部の私がかかわることになったのは、1年次秋の進路面談からでした。大学進学者の割合が約1割の本校では、大学進学希望者の面談は進路支援部が引き受けていたのです。

父親と面談に臨んだAさんは、希望進路として他県の私立大学を挙げました。ところが父親は、「大学には行かせない。働いてもらう」と娘の進学を否定。取りつく島もない態度の父親を、私は「少し話を聞いてみませんか」などと諫めることもできませんでした。涙目のAさんに私ができたことは、大学で専攻したいという生活科学に関する本を「読んでみたら？」と紹介することくらいでした。面談後、私は「Aさん、落ち込んだらどうな。ますます荒れるだろうな」と悶々としていました。

翌週の月曜日の朝、進路相談室にAさんが来ました。予想外の訪問を内心で驚く私に、彼女は「うちの親、どう思う？」「メチャクチャむかつく！」と怒りをぶちまけてきました。私が彼女の志望に関連する本を渡したから、「この先生は話を聞いてくれる」と思ったのかもしれませんが。彼女は自分の考えを否定した親をののしるとともに、育った家庭の状況によって人生が左右される社会の現状への不満を吐き出しました。

私はAさんの言葉にじっと耳を傾けました。しかし、「そうだよね」とAさんの怒りに安易に同意しても、Aさんの状況は何も変わりません。そこで私はこう言いました。「文句があるのなら、それを文章にしてみたら？ 文章にして訴えることは、むかつく世の中を変える手っ取り早い方法だよ」と。私の言葉にAさんは、「分かった」とうなずきました。そして私は、手元にあった未使用の手帳を彼女に渡しました。

毎 週月曜日、Aさんは社会に対する怒りや疑問をつづつた手帳を持ってきました。使われる言葉は汚く、文章もつたないけれど、内容は面白いと思いました。彼女には書くことが合っていたのです。Aさんの言葉に私がコメントし、それにまた彼女が返す。手帳を介した対話が続く中で、Aさんは自分を客観視し始め、人の心のあり方に興味があることを自覚していきました。それまで全く読書をしなかった彼女に、ハイデッガーの入門書を貸したのは2年生進級目の頃でした。

Aさんとののかかわりはその後も続きました。名古屋大学に進学し、3年生になった彼女は今、ドイツ哲学を学んでいます。

荒れていたAさんに、浅井先生はどのような支援をしたのか。Aさんはどのように変化し、名古屋大学合格にたどり着いたのか。Aさんが書いた手帳の内容を紹介したウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。



<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article18315/>